

「SRA Reading Laboratory」を使った授業から見える大学生の英語読解力の低下について

その他のタイトル	The Decline of Reading Ability in Japanese University Students Observed Through the "SRA Reading Laboratory"
著者	李 春喜
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	14
ページ	67-76
発行年	2016-03
URL	http://hdl.handle.net/10112/10202

「SRA Reading Laboratory」を使った授業から 見える大学生の英語読解力の低下について

The Decline of Reading Ability in Japanese University Students Observed Through the “SRA Reading Laboratory”

李 春 喜
Haruki Lee

This is a case study that shows, by using the “SRA Reading Laboratory” published by McGrawHill, what changes took place among Japanese university students between 2000 and 2014.

Level 2a of the “SRA Reading Laboratory” is divided into six levels based on difficulty. I regard the bottom two levels to consist of “poor readers,” the top three levels to consist of “good readers,” and the fourth level from the top (i.e. the third level from the bottom) as “average.” I compare the number of students who have reached each level between students in 2000 and those in 2014.

The results show that not much difference can be seen among those described as “average” between 2000 and 2014, but the numbers of those described as “good” and “poor” are inversed during the same period, which indicates the reading ability in Japanese university students is drastically declining.

キーワード

日本人大学生 (Japanese university students)、読解力低下 (declining reading ability)、SRA 読解教材 (SRA Reading Laboratory)、2000年から2014年 (between 2000 and 2014)

I. はじめに

McGrawHill 社から刊行されている「SRA Reading Laboratory」(以下、「SRA」と表記)という英語のリーディング教材がある。「SRA」は、主として英語母語話者のリーディング教材として開発されたものだが、英語母語話者だけでなく、英語を外国語として学ぶ世界中の学習者にもよく利用されている。

以前は、日本で McGrawHill 社から「SRA」を購入すると、今村洋美氏が執筆された「SRA

リーディング教材の解説と効果的な指導法¹⁾という小冊子を手に入れることができた。それによると、

SRA リーディングラボ (SRA Reading Laboratories) は、アメリカ合衆国で 1957 年に開発されて以来、合衆国内の幼児から大学生および一般成人に至る数多くのアメリカ人のみならず、世界中の学習者によって使用されているリーディング教材です。この半世紀に渡り、世界中で 1 億人以上の学習者が、この SRA リーディングラボを活用して英語のリーディング力を向上させています (今村、1 頁)。

と記されている。

この教材の核となる部分は「Reading Lab」と呼ばれ、レベル 1、レベル 2、レベル 3 の三つのレベルに分かれている。それぞれのレベルはさらに a、b、c と別れているため (レベル 3 は a と b のみ)、全体としては、1a、1b、1c、2a、2b、2c、3a、3b のように、八つのレベルに分類されている。

今村氏の「SRA リーディング教材の解説と効果的な指導法」によると、「レベル 1a-c は、(中略) 日本では中学生ならびに基礎のできていない高校生に最適です」(今村、1 頁) と記されている。また、「レベル 2a-c は、(中略) 日本では高校生以上に適し、最もよく使われている教材です」(今村、1 頁) と記され、さらに、「レベル 3a-b は、焦点を文学の読解に絞った教材で、大学レベルでの授業のノートの取り方についての練習なども含み、アカデミックな英語力を養成するかなり高水準の内容」(今村、1 頁) と記載されている。

筆者は、学力が中堅レベルの関西にある総合私立大学に勤務している。2000 年度の春学期に、自然科学系学部の一クラス (46 名)、社会科学系学部二クラス (40 名と 41 名) を対象に、「SRA」をリーディング教材として複数回使用した。これらのクラスにおいて筆者は、「日本では高校生以上に適し、最もよく使われている」と今村氏が言われている Reading Lab レベル 2a を使用した。

「SRA」では、まず最初に学習者に対してプレイズメント・テストを行い、各学習者のレベルに合った教材を決定することから始める。「Reading Lab」は各レベルとも色別にレベル分けされている。レベル 2a の場合、レベルの低い方から、Brown → Lime → Aqua → Blue → Purple → Violet → Rose → Red → Orange → Gold という順番になり、Gold が一番レベルが高い色である。

II. 2000 年度

筆者が 2000 年度に担当したいわゆる「教養英語」のクラスでは、春学期だけで「SRA」を六回実施することができた。具体的な実施方法は以下のとおりである。

「SRA Reading Laboratory」を使った授業から見える大学生の英語読解力の低下について（李）

今村洋美氏が「SRA リーディング教材の解説と効果的な指導法」で提案されているように、レベル別に分けられたリーディング問題に取り組み、「内容理解問題」と「語彙問題」の両方で80パーセント以上の正答率を得た者を「合格」とし、それが三回に達成した場合、その学習者は一つ上のレベルの「色」に進めることとした。しかし一度でも、「内容理解問題」と「語彙問題」のどちらかで80パーセント以上の正答率を得られなかった場合は、次回から一つ下のレベルの問題に取り組ませた。「SRA」を春学期内に六回実施した結果、学期の終了時には、各レベルの人数は以下ようになった。便宜上、欠席者の数はカウントしていない。

自然科学系学部 46 名

表 1（自然科学系学部）

色	人数
Brown	4
Lime	9
Aqua	11
Blue	11
Purple	11
Violet	0
合計	46

2000年度は、自然科学系のクラス一つの他に、経済学部40名一クラス、商学部41名一クラスを担当し、自然科学系の学部と同じように、春学期だけで「SRA」を六回実施した。自然科学系学部のクラスで実施したのとまったく同じ方法で受講生のレベルを調整していった結果、春学期の終了時における受講生の各レベルの人数は以下ようになった。

経済学部 40 名

表 2（経済学部）

色	人数
Brown	2
Lime	6
Aqua	11
Blue	9
Purple	9
Violet	3
合計	40

商学部でも、経済学部とまったく同様の方法で「SRA」を実施し、春学期の終了時に以下のよ

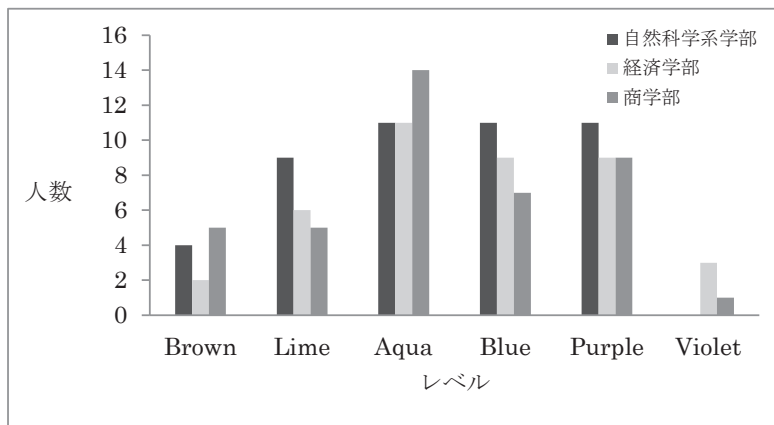
うな結果を得た。

商学部 41名

表3 (商学部)

色	人数
Brown	5
Lime	5
Aqua	14
Blue	7
Purple	9
Violet	1
合計	41

以下は、表1から表3までの結果の分布を棒グラフに表したものである。



今回、筆者が「SRA」の結果をまとめてみようと思ったきっかけは、「SRA」がリーディング教材として優れていたからではなく（「SRA」がリーディング教材として優れていることは長年多くの学習者が利用していることから分かる）、2000年度から2014年度の十四年間に、同じ大学に入学してくる学生の英語の読解力がどのように変化しているか調べてみたかったからである。言うまでもなくこの「研究ノート」はランダム抽出の結果ではない。

Ⅲ. 2014年度

次に紹介するのは、筆者が、同じ大学で2014年度に「SRA」を実施した結果である。対象学部は自然科学系学部一クラス40名、社会学部一クラス42名、法学部一クラス42名だった。

「SRA Reading Laboratory」を使った授業から見える大学生の英語読解力の低下について（李）

これらのクラスでは年間をとおして四回しか「SRA」を実施できなかったが、表4から表6は、年度の終わりに各レベルに取り組む受講生が何人になったかを示している。実施方法は2000年度とまったく同じである。受講生はレベル別に分けられたリーディング問題に解答して、「内容理解問題」と「語彙問題」の両方で80パーセント以上の正答率を得た場合「合格」となり、そのレベルで三回「合格」に達した場合、一つ上のレベルに進む。しかし一度でも、「内容理解問題」と「語彙問題」のどちらかで80パーセント以上の正答率を得なかった場合は、次回から一つ下のレベルの問題に取り組むこととした。2000年度と同じく、欠席者の数はカウントしていない。結果は以下のとおりである。

自然科学系学部 40 名

表4（自然科学系部）

色	人数
Brown	6
Lime	13
Aqua	10
Blue	4
Purple	4
Violet	3
合計	40

社会学部 42 名

表5（社会学部）

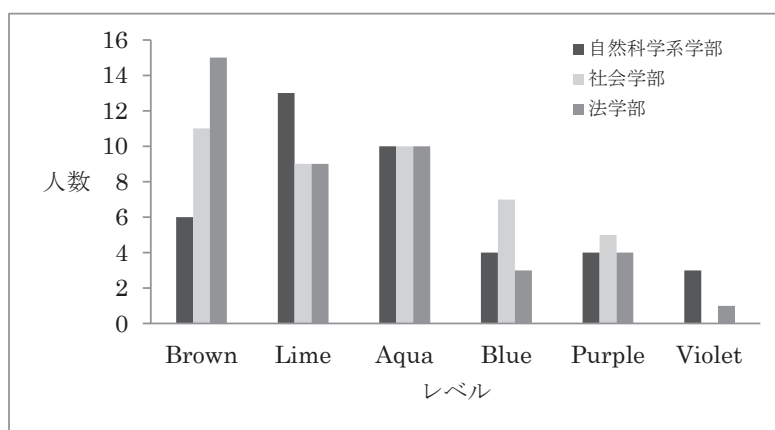
色	人数
Brown	11
Lime	9
Aqua	10
Blue	7
Purple	5
Violet	0
合計	42

法学部 42名

表6 (法学部)

色	人数
Brown	15
Lime	9
Aqua	10
Blue	3
Purple	4
Violet	1
合計	42

以下は、表4から表6までの結果の分布を棒グラフに表したものである。



IV. 評価

色によるレベル分けを利用して、BrownとLimeを読むよう指示された受講生を、1)「どちらかというとな英語を読むのが苦手」な学生、Blue、Purple、Violetを読むよう指示された学生を、2)「比較的、英語を読む能力が身につけている学生」、Aquaを3)「その中間」と暫定的に定義しておく。

表1'から表6'は、表1から表6に示された名レベルの人数を率(%)で示したものである。小数点以下第2位で四捨五入してある。

「SRA Reading Laboratory」を使った授業から見える大学生の英語読解力の低下について（李）

2000 年度

表 1' (自然科学系学部)

色	人数比 (%)
Brown	8.7
Lime	19.6
Aqua	23.9
Blue	23.9
Purple	23.9
Violet	0

表 2' (経済学部)

色	人数比 (%)
Brown	5
Lime	15
Aqua	27.5
Blue	22.5
Purple	22.5
Violet	7.5

表 3' (商学部)

色	人数比 (%)
Brown	12.2
Lime	12.2
Aqua	34.1
Blue	17
Purple	22
Violet	2.4

2014 年度

表 4' (自然科学系学部)

色	人数比 (%)
Brown	15
Lime	32.5
Aqua	25
Blue	10
Purple	10
Violet	7.5

表5' (社会学部)

色	人数比 (%)
Brown	26.2
Lime	21.4
Aqua	23.8
Blue	7.1
Purple	9.5
Violet	2.4

表6' (法学部)

色	人数比 (%)
Brown	35.7
Lime	21.4
Aqua	23.8
Blue	7.1
Purple	9.5
Violet	2.4

表1' から表6' で明らかなように、どの表においても、読解力の「中間」と定義した Aqua を読む学生の人数比は、23.9%、27.5%、34.1%、25%、23.8%、23.8%と、多少のこぼこはあるにしても、2000年度と2014年度との間では、ほぼ一定の範囲内に「中間」層が収まっていることが分かる。

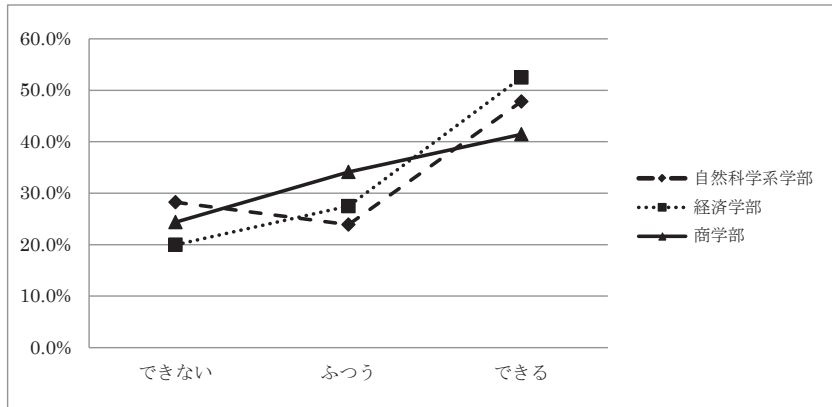
しかし、Brown・Lime (「どちらかというとも英語を読むのが苦手」) を読んだグループの人数比は、2000年度において、28.3% (自然科学系学部)、20% (経済学部)、24.4% (商学部) であるのに対して、2014年度では、47.5% (自然科学系学部)、47.6% (社会学部)、57.1% (法学部) である。

一方、Blue・Purple・Violet (「比較的、英語を読む能力が身についている」) を読んだグループの人数比は、2000年度において、47.8% (自然科学系学部)、52.5% (経済学部)、41.4% (商学部) であるのに対して、2014年度では、27.5% (自然科学系)、19% (社会学部)、19% (法学部) と見事に逆転している。

以下は、表1' から表3'、つまり2000年度の読解力の各レベルの人数比を、1)「できない」、2)「できる」、3)「ふつう」と再コード化し、それを折れ線グラフに表したものである。

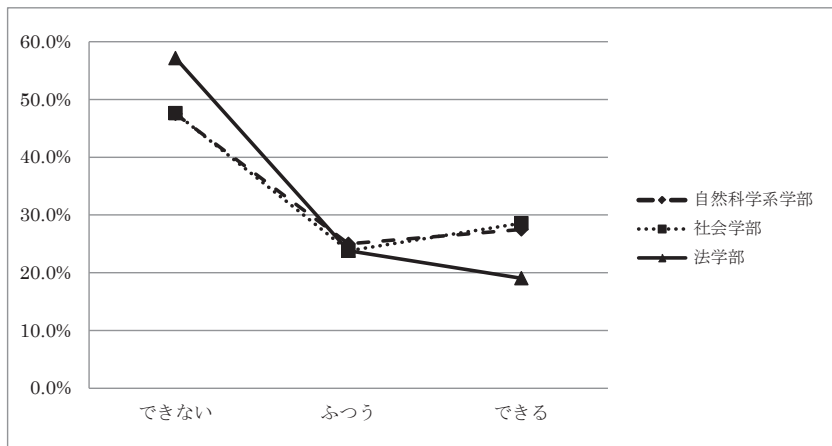
「SRA Reading Laboratory」を使った授業から見える大学生の英語読解力の低下について（李）

2000 年度



以下の折れ線グラフは、同じように表 4' から表 6'、つまり 2014 年度の読解力の各レベルの人数比のばらつきを折れ線グラフに表したものである。

2014 年度



これらの図表が示しているように、2000 年度から 2014 年度の 14 年間の間に、筆者が勤める大学に入学してくる学生の英語の読解能力は明らかに低下していることが分かる。しかしこの傾向は、筆者が勤める大学だけに見られる現象ではなく、同じような現象は、おそらく、日本のすべての大学で確認できるのではないかと想像する。

最後に一点指摘しておきたい。

冒頭でも触れたとおり、「SRA Reading Laboratory」は、もともと英語母語話者のために開発されたリーディング教材である。今村氏が「日本では高校生以上に適し、最もよく使われている教材」と指摘される「レベル 2a-c」とは、英語母語話者の「GRADES 4-6」に分類されて

いる。つまり、小学校4年生から6年生ということである。「Reading Lab 2a」のレベルにおいて、たとえ、「比較的、英語を読む能力が身につけている」と定義したBlue・Purple・Violetに相当する学生でさえ、英語母語話者のレベルでいうと、小学生レベルということになる。しかもそれは、日本人が比較的得意とされるリーディングにおいて妥当することであり、同じような調査を、スピーキング・リスニング・ライティングで実施すれば、結果はさらに悲観的なことが予想される。

V. 展望

筆者は、2002年3月発刊の『関西大学 視聴覚教育』第25号(李、46-48頁)²⁾において、1998年度と1999年度に担当した一部のクラスのTOEICの平均点数を開示している。それらのクラスでは、年度内に2回TOEICを受験し、そのスコアの提出を受講生に義務づけた。1998年度の40名のクラスでは、TOEICリーディング・リスニングの総合平均点は、1回目401点、2回目413点であった。1999年度の30名のクラスでは、1回目の総合平均点は550点、2回目の総合平均点は590点であった。

1998年、1999年と現在(2016年)では、社会の状況が大きく変化したので、同様の調査はなかなか実施できないと思われるが、仮に、筆者の勤める大学の2016年度の学生にTOEICを受験させ、そのリーディングとリスニングの平均点を算出すれば400点に届かないのではないかと危惧している。

このように、大学に入学してくる学生の基礎英語力が低下している以上、大学での英語の授業も、それに合わせて工夫せざるをえないのが現状であり、今後、その傾向はますます顕著になるものと思われる。筆者も含めて、大学で英語を教える教員一人ひとりの努力が今後一層必要になるであろう。

注

- 1) 今村氏の「SRAリーディング教材の解説と効果的な指導法」は、現在の書誌情報では2002年の業績と記載されているが、筆者がMcGrawHill社の「SRA Reading Laboratory」を授業で使用し始めた2000年以前にすでに入手できる状態にあった。
- 2) 李春喜「英語Vプラクティカル・イングリッシュ・セミナー——現場からの報告」『関西大学 視聴覚教育』第25号、2002年3月、46-48頁。